高橋梵仙著『日本人口史之研究』

南　亮三郎

著者は中央社會事業研究所々員、豫て日本人口の歴史的研究に沒頭せられてゐたが、この程その成果をとり纒めて刊行せられた。『日本人口史之研究』（昭和十六年十一月、三友社、價十二圓）がそれで、菊判八五三頁に及ぶ大冊である。

内容は二篇に分たれ、第一篇では上古、中古、近古、及び近世の日本人口事情が概説せられ、第二篇では專ら德川時代各藩の人口制限並びに人口對策の史實が講究せられてゐる。第一篇にも著者の苦心は充分に認められるが、遙かに大なる努力が注がれたのは第二篇の諸章であつたと察せられる。第二篇の記述は全卷の大約三分の二を占めてゐるのである。著者はさきに『墮胎間引の研究』（中央社會事業研究所、昭和十一年九月）といふ一書を發表し、德川時代各藩の秘められたる史實を明るみに出されたことがあるが、今回の著作の第二篇はこの前著を中心にして研究を擴め、完璧を期せられたものと思はれる。

通讀して受ける本書の印象は何よりも先づ確實なる史實を求め檢證して日本人口史に對する一箇のQuellenbuchを提供せんとする著者の謙讓なる然し逞しい意圖と努力とにある。著者はみづからこれを述べて序文中に、『本書の讀者諸氏の中には、内容を一見したとき、奈何にも啓蒙的な要素に乏しいと感じ、直に此點を批難する方面も無いとは限らないが、其は根本的に考方に於て誤謬があるのであつて、予の立場は元々世の啓蒙的な史家に對して、確實なる史實を提供することが眼目である』と云つてゐる。それ故に著者は引照については特別の注意を拂ひ、『予は甚だ不敏ではあるが、引用の史資料は申すに及ばず、先人の著書による記述は勿論のこと、其中に引用せられてゐる事柄に關しても、一々原本に依據して考勘し、斷として世に所謂耳食孫引の類を避け』た旨を述べてゐる。これら

の言葉は、人口史實の源泉書としての本書の特徴と、高潔なる著作家としての著者の風格とを示すに充分である。

本書を以て斯様に日本人口史實に關する一箇の忠實なる源泉書と見るとき、卷頭に添へられたる小野武夫博士の序文が指摘してゐる本書の一弱點は左程致命的なものとは見えないかも知れない。即ち小野博士は本書の問題の取扱方について『例へば人口現象の變遷過程に於て其れを斯くあらしめたる各時代の又は各地域の政治、經濟、文化との關聯性の説明が稀薄で、人口史を繞る時代相と地域相とが充分に描寫されてゐない』點を指摘してゐられるが、終始『確實なる史實を提供することを眼目』としてゐる本書の著者にとつては、むしろこの點の究明こそ他の『啓蒙的な史家』に委ねべきものと見えたのであらう。本書には丹念周密なる史實檢證の努力が盛られてゐる、しかし、この豐富なる史實に社會科學的な解明を與へ、又それを基礎として統一的な『日本人口史』を編むといふ工夫は、別箇の事業として本書外に殘されてゐる。

正にこの點について吾々に無限の示唆と刺激とを與へるものはエリッヒ・カイザーの近業『ドイツ人口史』（ライプチヒ、一九三八年）であらう。この書はドイツ民族の成生、變化、及び發展を人口の見地より究明した最初のもので、包括的、系統的、且つ思想的なる點であらゆる人口史研究の一典範たるに値する。日本人口についても亦これに匹敵する歴史の出現することが待望せられる。高橋氏の勞作は、かゝる歴史書の出現を準備し、且つ可能ならしめるに必要なる基礎研究の一つとして意義極めて重大であると云はねばならない。